

## 新制中学校発足期の古典教育

——『中等国語』の古文教材——

岩 崎 淳

はじめに

昭和二十二年四月に新制中学校が発足し、中学校は義務教育となった。文部省著作『中等国語』（昭和二十二年より発行）は、新制中学校で使用されるために作成された教科書であり、現時点では最後の国定国語教科書である。最初の民主主義的教科書として、後続の検定教科書に与えた影響は大きい。

本稿の目的は、『中等国語』に収録された古文教材について考察することによって、新制中学校発足期の古典教育の一端を明らかにすることである。本稿では、古典教材の範囲を日本の古典作品に限定し、漢文教材はその対象外とする。

### 終戦前後の中等学校用国語教科書の推移

終戦前後の日本の各界の動向はあわただしいものであり、教育

界もその例外ではなかった。

昭和十八年一月に「中等学校令」が公布され、教科書は国定となった。それにともない、『中等国文』、『中等文法』、『中等漢文』等の教科書が編纂された。

昭和二十年九月の「終戦三件フ教科用図書取扱方二関スル件」（通牒）で、教科書の削除修正の基準が示された（それに従って修正された教科書が、いわゆる「墨ぬり教科書」である）。

昭和二十一年四月からは、『中等国語』が使用された。いわゆる暫定教科書である。

昭和二十二年四月からは、前述のとおり新制中学が発足し、新制用『中等国語』の使用が開始された。

昭和二十四年四月からは、検定教科書の使用も開始された。戦前とは異なり、文部省の検定とは別に、CIEによる検定にも合格しなければ、教科書にはならなかった。

終戦前後に文部省で編纂された三種の中等学校用の国定国語教科書について、その役割を改めて整理すると、次のようになる。

『中等国文』は、文部省著作教科書として、巻五(三年の前期用)まで刊行された。最初の中等学校用国定教科書で、旧制の中学生を対象にしている<sup>1)</sup>。

暫定『中等国語』(以下暫定本とよぶ)は、旧制中学用の最後の教科書である。国文篇・文法篇・漢文篇によつて構成されている。一から三までの教科書は、それぞれ、前・中・後の分冊になっている。

新制用『中等国語』(以下たんに『中等国語』とある場合は、新制用を指す)は、新制中学校用の最初の教科書である。漢文教材は収録しているが、文法教材は収録していない。一年生用三冊、二年生用四冊、三年生用四冊の計十一冊からなる。

表Aは、この三種の教科書における古文教材の占める割合を示したものである<sup>(2)</sup>。この表から、わずか数年間で、古文教材の占める割合が一割ずつ減少していることがわかる。

〈表A〉

教科書	課の数	古文の課	比率
中等国文	63	35	55%
暫定本	51(※1)	19	37%
中等国語	74(※2)	13	17%

※1 文法篇・漢文篇を除く。  
※2 漢文教材を除く。

### 『中等国文』と暫定本との比較

表Bは、暫定本の古文の課名を出典とともに示したものである(「一前」とあるのは、暫定『中等国語一』の前という分冊に収められていること示す。以下同)。その課が『中等国文』と共通している場合は、『中等国文』の収載巻数を上段に示した。

〈表B〉

中等国文	暫定本
卷一	一前 富士の高嶺(万葉集)
一	一前 親心(雲津雄誌)
二	一後 一門の花(平家物語)
二	一後 すすきの穂(良寛・橘曙覧)
二	一後 創始者の苦心(蘭学事始)
四	二前 豊の年(万葉集)
四	二前 大国主神(古事記)
四	二前 高名の木のほり(徒然草)
四	二前 月天心(蕪村)
五	二後 学びの道(宣長)
五	三前 若菜(古今集)
五	三前 やまとうた(古今仮名序)

五	三前 春は曙（枕草子）
五	三前 先達（徒然草）
五	三前 奥の細道
五	三後 天の香具山（新古今集）
※1	三後 あづまち（更級日記・十六夜日記）
五	三後 敷島の道（増鏡）
五	三後 恩賜の御衣（大鏡）

※1 男子用にはないが、女子用巻五に収録されている。

暫定本の古文教材のうち、宣長の「学びの道」だけが『中等国文』には採録されていない。他はすべて『中等国文』の古文教材を受け継いだものであり、その順序も『中等国文』のとおりである。『中等国文』の古文教材を基本的に継承しながら、それを取捨選択しようとする編纂態度がうかがえる。結果的に、それは古文教材の減少につながる。

『中等国文』にあつて、暫定本に採録されなかった作品には、『常山紀談』『太平記』『義経記』『平治物語』『神皇正統記』などがある。時代状況を鑑み、武士道や軍記、神道などに関わる教材は採録しなかったのである。古文教材が減少した理由の第一である。

『中等国文』では、『平家物語』をはじめ、複数の課で採録されている作品が少なくない。一方、暫定本で二つの課で教材化されているのは二作品ほどで、同一作品からの複数採録は少なくなっている。古文教材が減少した理由の第二である。

### 暫定本と『中等国語』との比較

表Cは、『中等国語』の古文の課名を出典とともに示したものである（一）（二）四とあるのは、一年生用の第二分冊の第四課の意。以下同。その課が『中等国文』や暫定本と共通している場合は、それぞれ収載巻数も合わせて示した。

〈表C〉

中等 国文	暫定本	『中等国語』
二 二後	一 一後	一(1)十 末ひろがり（狂言） 一(2)四 創始者の苦心（蘭学事始） 二(1)六 一門の花（平家物語） 二(1)七 舞へ舞へかたつむり（梁塵秘抄） 二(2)五 万葉秀歌（斎藤茂吉） 二(3)四 鬼にこゝ取らるること（宇治拾遺物語） 二(3)七 ひさかたの（古今集）
五 三後	三 三前※1	三(1)一 天の香具山（新古今集） 三(1)九 長歌（万葉集）（良寛） 三(1)十 羽衣（謡曲） 三(2)四 芭蕉の名句（額原退蔵）（芭蕉） 三(3)五 随筆二題（徒然草）（枕草子） 三(3)五 随筆一題（徒然草）（枕草子） 三(4)四 螢雪の功（新語園）（駿白雑話）
四 二前・三前※2	五 三前※3	

※1 短歌十一首を採録する。その中で九首が『中等国語』と

共通する。

※2 暫定本二前では『徒然草』から七段を採録する。その中で、「ある人、弓を射ることを習ふに」「高名の木のほり」の二段が『中等国語』と共通する。三前では『徒然草』から六段を採録する。その中で、「一道に携わる人」の段が新制用と共通する。合わせて、『中等国語』採録の四段のうち、三段が共通していることになる。

※3 『枕草子』から八段を採録する。その中で「春は曙」の段が『中等国語』と共通する。

暫定本にあり、『中等国語』で採録されなかった作品には、『雲萍雜誌』『古事記』『更級日記』『十六夜日記』『増鏡』『大鏡』などがある。これらは現在でも中学生用の教科書ではあまり採録されない。

『中等国語』でそれらの作品を採録しなかったのは、難易度や学習者の興味や関心を考慮してのことであろう。古文教材が減少した理由は、義務教育化による学習者の変化への配慮からである。『中等国語』は、戦後の中学用教科書のあり方に一つの規範を示したと言えるが、古典教育においても、その影響は大きい。

『万葉集』や芭蕉の句などを除外すると、暫定本になく、『中等国語』にある古文教材は「末ひろがり」「鬼にこぶ取らるること」「羽衣」の三教材となる。

昭和期の旧制中学教科書では、「羽衣」はよく採録されていたが、「末ひろがり」と「鬼にこぶ取らるること」の採録は二、三

の教科書にとどまっている。

戦前の古典教育を継承しつつ、義務教育という点を考慮して、演劇性や親しみやすさを重視したところに新制中学用国語教科書としての『中等国語』の特徴の一つがあろう。

### 『中等国語』の古文教材と「手引」

『中等国語』の教材は、全般的に民主主義と国際理解を重視した文章が多い。そのような教材群の中で、古文ではどのような教材化がなされたのか、本節でその概要を記す。なお、昭和二十三年刊行の『中等国語』修正版には、巻末に「国語学習の手引」が付されており、本稿では以下これを「手引」と呼ぶ。

#### 【(1)「末ひろがり」(狂言)】

主人の使いで都へ末広がりを買に行った太郎冠者が、詐欺師にだまされて古傘を買ってきってしまう話である。太郎冠者の囃子物によって主人の機嫌もおろろという場面が最後にあり、脇狂言にふさわしい終わり方となっている。

「手引」には、「話の筋をつかみ、場面に切ってみる」「現代文に書きなおし、これを本文と比較してみる」「狂言について研究する」「笑い」とはどんなものか、もつと調べる」の四項目が示されている。

#### 【(2)四「創始者の苦心」(蘭学事始)】

『ターヘル・アナトミア』翻訳から、『解体新書』出版にかけての苦心談を教材化している。『蘭学事始』の上之巻の末尾から下之巻の冒頭の部分である。

「手引」には、「外国語を学ぶには、どんな苦心があるか」、「三心の小径」と比較してみる。自分たちの外国語学習について話し合う」とあり、古典と現代文の比較や、学習者自身の経験との比較をおして、より考えを深めさせようとしている。

【(1)六「二門の花」(平家物語)】

「故郷の花」「青山の琵琶」と題する二つの文章を収める。それぞれ、「忠度都落」「経正都落」として知られる二章段である。

「故郷の花」は、「歌道に深く心を入れていた忠度が、都落ちの途中から引き返し、藤原俊成を訪れ、一巻の家集を託す。俊成は後に『千載和歌集』を撰ぶ際に忠度の一首を入れた」という和歌説話で、『平家物語』の中でもとくに完成度の高い章話として知られる。「青山の琵琶」は、「経正は、幼時に仕えていた仁和寺の宮を訪れ、拝領した琵琶の名器青山を返上する。寺の人々は別れを惜しむが、中でも行慶法印が桂川まで同行して見送りをする」という芸能説話である。他の軍記物語が採録されなかったのに対して、『平家物語』のこの部分が採録されたのは、叙情性が高く、戦乱の陰の悲しみを描いているからかもしれない。

「手引」に「むずかしいことはやわらかない事がらを、どう研究したらよいか、その調べ方になれるようにする」「二つの物語が何を表しているかを考える」「勅撰集・平家物語・源平盛衰記などについて調べる」などの指示がある。

【(1)七「舞へ舞へかたつむり」(梁塵秘抄)】

『梁塵秘抄』から、「舞へ舞へかたつむり……」「まつの木かげに立ちよりて……」「池の涼しきみぎには……」「遊びをせむとや

生まれけむ、……」の四首を教材化している。歌の楽しさを感じたり、季節感を味わったりして、古典に親しむように意図されている。この課では、この後に北原白秋の「日光」「ひがらとつき」という二つの詩を掲載している。

「手引」には、「梁塵秘抄の詩と、このあとの二つの詩とを比較してみる」「童謡や民謡を採集して研究する」とある。古典の文章と現代の文章の比較はめずらしく、編集者の先見性がうかがえる。

【(2)五「万葉秀歌」(斎藤茂吉)】

斎藤茂吉の「万葉秀歌」から、「春過ぎて夏来たるらし……」「(持統天皇、「天さがる夷の長路ゆ……」(入麻呂、「若の浦に潮満ち来れば……」(赤人、「わが背子はいづく行くらむ……」(当麻真人麻呂の妻、「憶良らは今は罷らむ……」(憶良)の短歌五首を採る。

「手引」には、「これらの歌人について調べる」「万葉集の代表的な歌について研究する」などの発展的な学習活動を指示するものもある。

【(2)四「鬼にこぶ取らるること」(宇治拾遺物語)】

原文の前に編集委員による解説があり、「こぶとり」の話が日本だけでなく、朝鮮や中国、ヨーロッパの国々にもあることを述べ、学習者の興味を喚起しようとする。

「手引」では、自分たちの知っている「こぶとり」の話との比較や、弟妹にこの話をして聞かせるといった活動を示している。

【(2)七「ひさかたの」(古今和歌集)】

原文の前に『古今和歌集』の解説があり、『万葉集』や『新古今和歌集』との比較を促している。末尾に「この集の人々によつてうたわれている四季おりおりの趣を味わってみよう」とあるとおり、季節の順に掲載され、四季の巻以外の歌は一首にとどまる。詞書きと作者名がある。撰者の歌を中心に選んでいる。

「春日野のとぶ火の野守……」（春上 よみ人知らず）、「人はいさ心もしらず……」（春上 貫之）、「ひさかたの光のどけき……」（春下 友則）、「わが宿の池のふちなみ……」（夏 よみ人知らず）、「はちす葉のにこりにしまぬ……」（夏 遍照）、「風吹けば落つるもみぢ葉」（秋下 躬恒）、「山里は冬ぞさびし……」（冬 宗于）、「みよしの山の白雪……」（冬 忠岑）、「忘れては夢かとぞおもふ」（維下 業平）など九首を載せる。

「手引」には「ことばがき」のついた和歌を作る、という指示がある。

### 【三(一)「天の香具山」(新古今和歌集)】

古典和歌の最初の学習 二(2)五 では斎藤茂吉の解説を引用し、次の二(3)七の『古今和歌集』の学習では、原文の前に解説を付けていた。『新古今和歌集』を学習する本課では解説はない。歌の前に詞書きと作者名がある。「ほのぼのと春こそ空に……」（春上 後鳥羽院）、「なごの海のかすみのまより……」（春上 藤原実定）、「夕月夜しは満ち来らし……」（春上 藤原秀能）、「庭のおもはまだかわかぬに……」（夏 源頼政）、「むかし思ふ草のいほりの……」（夏 藤原俊成）、「心なき身にもあはれは……」（秋上 西行）、「さりぎりす夜さむに秋の……」（秋下 西行）、「には

のうみや月のひかりの……」（秋上 藤原家隆）、「吉野川岸のやまぶき……」（春上 藤原家隆）、「旅人のそで吹きかへす……」（羈旅 藤原定家）、「こまとめてそでうちらはらふ……」（冬 藤原定家）など十一首を載せる。季節の推移を追うのは『古今和歌集』と同様だが、歌の配列は『新古今和歌集』どおりではない。

「手引」では、『万葉集』や『古今和歌集』の歌との比較を指示するほか、二(1)三「歌ころ」を読み返して、現代短歌と比べるよう指示している。

### 【三(1)九「長歌」(万葉集) (良寛)】

『万葉集』の「水江浦島子を詠める一首並びに短歌」と良寛の「月の兎」「鉢の子」という長歌及び短歌二首をあわせて一課をつくる。いずれも哀感のある作品である。

『万葉集』の歌は、浦島伝説に材をとった歌で、「手引」には「自分の知っていた話と比べてみる」という指示がある。「月の兎」は、「猿と狐と兎の仲が良いことを聞いた天帝が、その実際を知るため老人に身を変えて飢えを訴えた。ところが兎は食べ物調達できず、わが身を焼いて老人に与えた。天帝はその心根にうたれ、月の宮に兎を葬った」という悲しい長歌である。鉢の子とは、僧が施しを受けるのに持つ容器のことで、「大切にしていた鉢の子を忘れてしまい、探しに行こうとしたときに届けてくれる人がありうれしく思う」というのが長歌の内容である。続いて「道のべにすみれつみつ、はちのこを忘れてぞ来しそのはちのこを」「はちのこをわれ忘れど取る人はなし取る人はなしはちのこあはれ」の二首が掲載されている。

### 【三(1)十「羽衣」(謡曲)】

『丹後国風土記』などの羽衣伝説による三番目物である。二(3)四の「鬼にこぶ取らるること」と同じように、この話も外国にも類似の伝説が多い。採録にあたつては、そのような点も考慮されていたのかもしれない。

「手引」に「できれば、能を見たり、謡を聞いたりして、その実際を知る」「能や謡曲についてもつと調べ」といった指示がある。

### 【三(2)四「芭蕉の名句」(頼原退藏)(芭蕉)】

「山路来て何やらゆかしすみれぐさ」「閑かさや岩にしみ入るせみの声」「白露をこぼさぬはぎのうねりかな」「旅に病んで夢は枯れ野をかけめぐる」の四句が、頼原退藏の解説とともに掲載されている。原典は頼原の「芭蕉の名句」である。その後「うめが香にのつと日の出る山路かな」「ほろほろとやまぶき散るか滝の音」「さみだれの空吹き落とせ大井川」「朝露によごれて涼しうりのどろ」「赤々と日はつれなくも秋の風」「荒海や佐渡に横たふ天の川」「初しぐれさるも小蓑をほしげなり」「いざさらば雪見にころぶところまで」の八句が掲載されている(解説はない)。春から冬へという配列である。「手引」では、頼原の文で取り上げられた四句をそれぞれ推敲途中の句とならべてそのよしあしを考えさせたり、「吉野川岸のやまぶき……」(三(1)一で学習した和歌)と「ほろほろとやまぶき散るか滝の音」を比べて話し合わせてたりする活動が示されている。

### 【三(3)五「随筆二題」(枕草子)(徒然草)】

『枕草子』と『徒然草』の二作品を合わせて一課としている。原文の前の解説で、『枕草子』には「自然や人事などに対する女性らしい鋭い感受性が現れている」とし、「春はあけぼの」と「木の花は」の二章段を収める。ともに自然に関する文章である。『徒然草』からは「ある人、弓を射ることを習ふに」「高名の木のほり」「二道に携わる人」「人のものを問ひたるに」の四章段を採録している。いずれも若い者への人生訓的な内容を持つ章段である。解説の末尾には、「二つの随筆の特徴を比較して味わってみよう」とあり、比較による学習活動を指示している。

### 【三(4)四「螢雪の功」(新語園)(駿台雑話)】

『新語園』と『駿台雑話』の二作品を合わせて一課としている。教材の前の解説に「学問の道は限りなく遠く、人の一生はあまりに短い」「学問に精進したあまた古人の努力の跡をたずね(中略)悔いなき学徒の生き方を見出そう」とある。『新語園』からは「螢雪の功」の話を採録しており、実質的には漢文教材にちかい。『駿台雑話』からは巻五「年にはづかし」の一部を採録する。前半は陶淵明や朱子、陶侃など、中国の古人の言を引用している。

### 【中等国語】の特徴

『中等国語』の古文教材は、上代から近世までの各期にわたる。文種では詩歌教材が多く、物語の採録が比較的少ない。

『中等国語』の特徴として、第一に、先行する国定教科書と比べて作品数が減少したことがあげられる。これは前述のとおりで、軍記や神道関係の作品を採録しなかったのは、民主化への配慮か

らである。また、全体の作品数が減少したのは、義務教育制度（による入学者）への配慮からである。

第二の特徴は、学習者の興味を重視した教材選定をしていることである。こぶとりや浦島など、中学生にもなじみのある話を採録することで、古文に対する抵抗感をやわらげようと配慮している。

第三の特徴は、教材の提示のしかたを工夫していることである。斎藤茂吉や頼原退藏などの文章を教材化したり、原文の前に解説をのせたりして、古典の世界への橋渡しをしようとする姿勢がうかがえる。こぶとり説話の解説では、外国のことについても言及して、国際理解への配慮も感じられる。

以上の三点は、「古文に親しむ」ことを重視しているからであり、それは、現在の中学用国語教科書にも継承されている。『中等国語』によって示された枠組みは、新制中学校の基本方針となっている。

第四の特徴は、発展的な学習活動を設定していることである。教材に先行する解説や「手引」には、「……を調べよう」「……と比較してみよう」「……について話し合ってみよう」などの指示が多く見られる。理解をより深化させたり、より発展的な学習活動へとつなげようとしたりする姿勢が顕著である。

比較をする場合、自分の知っている話と古典に書かれている話との違いを考えるというように身近なところから活動をはじめようとする工夫が見られる。また、古典作品どうしはもちろん、古典作品と現代作品とを比較するなど、幅広く活動を設定している

点にも注目される。

この点は、現行の教科書に必ずしも継承されているわけではない。

現行教科書では収録教材の中だけで完結する方向の手引きが多い。それ自体は決して悪いことではなく、教科書の手引きという性質上当然のことである。

しかし、古典の学習活動が常に教材の中だけで完結するということのくり返しでは、活動に限界がある。現行の手引きの中にも、発展的な学習をうながす指示がないわけではないが、その数は『中等国語』のそれと比べれば少ない。

『中等国語』の「手引」を検討することは、今日においても大きな意義を有している。現代の教育にも通じる面が充分にある。

たとえば、「(1)十「末ひろがり」の「手引」にある「狂言について研究する」「笑い」とはどんなものか、もつと調べる」などの活動は、学習計画を立案していくうえで、その中心にすえることのできる活動である。場合によっては総合的な学習の時間や選択国語の課題ともなり得る可能性をもっている。主体的・創造的に取り組む態度を育て、問題解決の能力を育てる、という今日の要求に合致している。

それは、戦後の混乱期と、既存の価値観が見直され、将来が不透明となっている今日の社会的状況とに共通する面があるからである。

戦後半世紀以上を過ぎ、教育界にはさまざまな問題が未解決のまま山積している。とくに中学校は現代教育の矛盾の焦点と言わ



れているほど多くの難問を抱えている。国語科に関しては、教科内容、教科構造の面での改革を内外から数多く主張され続けながら、結論がでないままであり、ある意味では常に矢面にたたされているといった状況でもある。

教材の厳選と授業時数の減少が主張され、平成十四年度からは、中学校の国語科の授業時数も、現行の時数よりも減少することが決定している。古典教育も縮小に向かう恐れがある中、『中等国語』に示されたような学習活動を再検討することは、新たな展開を生み出す契機ともなろう。

## おわりに

文部省内で『中等国語』の編集作業と並行して作成されていた「昭和二十二年版学習指導要領（試案）国語科編」が刊行されたのは昭和二十二年十二月二十日のことであった。

その中には、「中学校の国語教育は古典の教育から解放されなければならぬ」とある。この考えは、『中等国語』の編集方針の一つであったのかもしれない。新制中学の発足によって、すべての生徒が中学校で教育を受けるようになったこともあり、『古典に親しむ』学習活動の具体化がこの『中等国語』であったと言える。

『中等国語』の古典教材や学習活動の指示などを見ると、終戦直後の困難な状況の中で、良質の人間の育成を願いながら編集作業に従事した人々の理念と情熱が感じられる。新制中学校の最初の教科書として、懸命に編集・作成された国語教科書であっ

た。

注

(1) 昭和十八年の「中等学校令」によって修業年限が一年短縮されたため、この時期の旧制中学の修業年限は原則として四年である。

(2) 『中等国文』と暫定本には、男子用と女子用とがある。本稿では、男子用を基に計算した。

(3) 採録した句歌はことなるが、芭蕉、良寛、『万葉集』、『梁塵秘抄』などは両方の教科書で教材化されている。

(早稲田大学大学院教育学研究科博士課程・学習院中等科)